

ということであろうか。マリアのお告げやイエス誕生の話を始め、イエスとともに十字架刑に処せられた二人の盗賊たちの話、エマオでの弟子たちなどルカにしかない短いストーリーがいくつもある。

さて「放蕩息子」である。私が試みた「入門講座」や「宗教」の授業で最も盛り上がったのは、その場面の登場人物の一人を選んで、その日の「日記」を書くという作業をしてみることであった。自由に登場人物を選んで書くようにいうと、女子中学生たちは過半が「兄の日記」を書く。おもしろいのは「召使いの日記」であった。これには客観的視点にたちながらも、それを書く人の気持ちがよく表れる。

入門講座では、できたら二人の日記を書き、そのうちのひとりは「弟のその日の日記」にすることをすすめる。弟の立場に立つて書くと「父親」の愛の深さを身にしみて感じるのである。

## ●——マリア

マリアを取りあげるときの導入はビートルズがいい。ビートルズの「レット・イット・ビー」の音楽とその英語の歌詞と日本語の訳を準備する。「レット・イッ

ト・ビー」がなぜ「知恵の言葉」なのかを読みとるために、お告げの場面の英語の聖書も用意するとよい。あるいは上々颱風ウツツフウというバンドグループが歌う、邦訳の「レット・イット・ビー」も、個人的には結構気に入っている。この訳は「いつでも神さまが見つけているよ」というようなものになっている。

そして改めてルカの「お告げの場面」や「エリザベト訪問」の場面を読んでみる。私たちが伝統的にこのマリアの「フィアットなれかし」から読みとるのは、マリアの従順さや敬虔さであるだろう。でもこのビートルズや上々颱風の歌を聴いた後にこの場面を読んだとき、ある人が「マリアさまは案外もつとおおらかに楽天的に骨太に自由に『神さまのいわれることだから何とかなるさ』くらいの気持ちだったのかもしれない」と言ったのが印象に残っている。

マリアが登場する聖書の場面を拾って、そこを読みあわせながら、マリアの性格、考え方、生い立ちを推察してみると、マリアの魅力がきわだってくる。私たちが身につけている伝統的なマリアの姿とはちよつと異なった女性像が描かれてくるのではないか。

ミステリーの女王アガサ・クリステイーの短編に

ずに書いたもののほうが抵抗なく、かつ面白い。

実はこのようなネタ探しが、勝負どころなのかもしれない。幸い、私にはこのようなネタをかぎわけける独特の嗅覚が備わっているようである。といっても私がオリジナルで作ったネタなどほとんどない。本を読んでヒントを得たものも多いが、その本も皆誰かから薦められたり、教えられたものであるに過ぎない。

入門講座の受講者や私の授業を受けている生徒は、そのような意味で貴重な情報源である。また同じように苦労している入門講座や「宗教」の授業の担当者たちとの「分かち合い」からも、多くのヒントを得ている。私の入門講座はそのような受講者や生徒や担当者との共同作業なのである。

「福音」という情報は、「与えることによって与えられる」「知られれば知られるほどに価値を生み出し」「福音が福音を呼ぶ」というフランシスコ的原理を本質的にもつものであるらしい。

〔次号につづく〕

（つちや・いたる／清泉女学院中学・高等学校教諭）

『ベツレヘムの星』（中村能三訳 早川書房）というマリアを主人公とした作品がある。マリアは「天使」からこの子の将来のいくつかの場面を見させられる。ミステリー仕掛けで最後に「どんでんがえし」があるのだが、このマリアもいい。

## ●——紹介したい場面はやまほどあるが

「イエスの復活をどう教えるのか」についても取りあげたいし、旧約の場面の取りあげ方についても、試行錯誤を繰り返してきたあげくの「苦勞の産物」も恥ずかしながら紹介してみたいが、それはまたの機会に譲りたい。

私が一番気に入っているのは「女たちのイエス」という「集い」、あるいは「授業」である（本誌一九九七年二月号、土屋至「学校でキリストをどう語るか」参照）。

これは私の好みなのだが、中学生と聖書を読むときも入門講座でも、参考資料として取りあげるの、でさるだけ宗教くさくない方がいいと思っている。聖書の読み方や解釈にしても、キリスト者が信仰者として書いたり、あるいは聖書学者がそれらしく書いたものよりも、そうでない人が自由に「宗教くささ」を持た